



長井 長義

ながい ながよし

Nagai Nagayoshi

1845 - 1929

明治・大正の薬学会で活躍した有機化学者。

エフェドリンの発見者。

日本薬学会初代会頭で、日本の近代薬学の開祖である。

【経歴と業績】

1845年、徳島藩医長井琳章の長男として出生。

1866年、長崎の精得館に赴いて、オランダ医のボードウィンに化学を、マンسفェルトに臨床医学を学んだ。

1869年、上京して大学東校(のち東京大学医学部)に入学。翌1870年には政府の留学生(医学)としてドイツに留学し、ベルリン大学のホフマンに師事して有機化学を専攻し、ドクトル・デア・フィロゾフィー Doktor der Philosophie 学位(Ph.D.に相当)を授与された。

1885年、麻黄からエフェドリンを発見し、その後、これが大量に合成可能であることを証明した。

1887年、東京薬学会(現 日本薬学会)の初代会頭に就任した。

1893年にはエフェドリンからメタンフェタミンを生み出す。

富山薬学専門学校(現 富山大学薬学部)の官立化に尽力した。これは副次的に熊本薬学専門学校(現 熊本大学薬学部)の官立 化にもつながった。

故郷である徳島にも、長義の進言で1922年(大正11年)、徳島高等工業学校応用化学科に製薬化学部(現在の徳島大学薬学部大学院薬科学教育部)が創設された。

1929年、感冒に起因する急性肺炎で逝去。



三宅 速

みやけ はやり

Hayari Miyake

1866 - 1945

世界的 な外科医学者。アインシュタイン博士との交遊が長く続いた。

九州大学名誉教授であり、胆石症の権威。

【経歴と業績】

1866年、徳島県穴吹町舞中島の医家に誕生。

1891年、東京帝国大学医科大学(現東京大学)卒業。

1893年、徳島市で県下はじめての三宅病院を創立した。

1898年、私費でドイツに留学し、ミクリッツ教授に師事。胆石症の研究により一躍世界的な医学者となる。

1900年、帰国し翌年医学博士の学位を得た。

1901年、大阪府立医学校(現大阪大学)の付属医院外科医長となる。

1903年、再び管費でドイツへ留学し、1904年9月に福岡医科大学教授となった。

1910年、州帝国大学初代外科部長に就任。指導者としても信望が厚く、名実ともに内臓外科の名手と絶賛された。福岡に着任して初めて行った胃癌手術はミクリッツ流、すなわちビルロート直伝の手術法で、当時の日本では最新の外科治療であった。

日本で最初の脳腫瘍手術や消化器内視鏡、胆石の手術等、様々な研究・臨床を行い、日本の外科学に貢献した。

1913年、日本外科学会会長となり、内臓外科手術で世界的学者と呼ばれた。

1922年、欧米視察旅行から帰途の船中、ドイツの理論物理学者アインシュタイン博士の急病を治療し、以降親交を深めた。

1936年、ドイツ外科学会国外会員、1943年に日本外科学会名誉会頭に推挙された。

1945年、米軍空襲により岡山県において没す。アインシュタインからは三宅先生夫妻の戦争による死を悼んで、自筆の哀悼文が寄せられた。

生地である穴吹町舞中島光泉寺境内には、アインシュタイン友情の碑が建てられ、碑文が刻まれている。



藤井 節郎

ふじい せつろう

Setsuro Fujii

1925 - 1989

コレステロールなど脂質の研究の国内の第一人者。

UFTの発明、ノイエル、FOY、フオイパン、フサンなどの発明と薬の開発、プラバスタチンの発明などに関与し多くの業績を上げた。

【経歴と業績】

1925年、広島県尾道市で誕生。

1949年、九州帝国大学医学部を卒業。

1953年、九州大学助手(医学部)となり、1959年4月同講師(医学部附属病院)、同年10月同助教授(医学部)

1962年、徳島大学教授(医学部附属酵素研究施設)となった。

1976年、大阪大学教授(蛋白質研究所)となり、病態生化学を担当。

1980年、財団法人藤井節郎記念大阪基礎医学研究奨励会を設立。

1984年、退官、同大学の名誉教授となり、同年に大塚製薬株式会社琵琶湖研究所長に就任。

1989年、64歳の若さで急逝された。

2013年、一般財団法人藤井節郎記念大阪基礎医学研究奨励会からの寄附を受けて、徳島大学蔵本キャンパスに藤井節郎記念医科学センターが設立された。

主なる業績は、「癌の生化学的研究」、「蛋白質分解酵素と病態に関する研究」「脂質代謝と病態に関する研究」の三つに大別される。

これらの基礎研究は血中アンモニア及びグアナーゼの定量法をはじめ制癌剤〔トラフルール、UFT〕、蛋白質分解酵素阻害剤〔ノイエル、FOY、フオイパン、フサン(FUT-175)〕、高脂血症剤(CS-514)などの開発につながるようになった。



田北 周平

たきた しゅうへい

Shuhei Takita

1906- 1987

消化性潰瘍の外科治療として迷走神経切離術をいち早く取り入れ、この方面での研究をリードした。

イレウス、腸管癒着症など消化管運動、平滑筋の生理を中心に多くの研究業績を残した。

【経歴と業績】

1906年、山口県下関市にて誕生。

1930年、九州帝国大学医学部を卒業。

1948年、九州大学助教授に任命される。

1954年、徳島大学医学部第一外科教授となる。

1960年、徳島大学医学部附属病院長、1961年には同医学部附属看護学校長を併任した。

1967年、日本学術会議生理科学研究連絡委員会委員として、第22回万国外科学会(ウィーン)、および連絡協議会のためオーストリア、スイス、イギリス、ドイツへ出張を命じられる。

1969年、徳島市にて第2回日本消化器外科学会総会を開催した。

1970年、ミュンヘン大学およびリーズ大学における招待講演および消化性潰瘍外科に関する研究調査のため、ドイツ、イギリスへ出張を命じられる。

1971年、徳島大学名誉教授となる。

1977年、叙勲三等旭日中綬章を授与。

1987年、逝去。